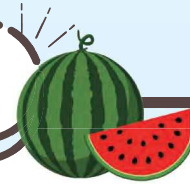


小玉スイカの庭先集荷、はじめました！



すいか部会は今年、ＪＡ全農あおもり、ヤマト運輸と連携し、小玉スイカの庭先集荷を初めて導入しました。生産者が選果・箱詰めしたスイカを作業場で引き渡し、ＪＡまでの運搬を省くことで、出荷負担を軽減する取り組みです。ヤマト運輸による農産物の庭先集荷は県内初です。

01 「運ぶ」を何とかしたい！

はじめは、すいか部会の役員会で出た「どうしたら集荷数量を増やせるか」という声でした。手数料の引き下げなどの意見が出る中、「庭先集荷をしてはどうか」という案が出ました。スイカとメロンの収穫時期が重なる生産者も多く、ＪＡまでスイカを運ぶことが負担になっていたためです。

そんな中、ヤマト運輸からＪＡ全農あおもりに「輸送分野で農家を支援できないか」との提案があり、庭先集荷を考えていたＪＡとのマッチングが実現しました。スイカの収穫期を目前に、今回の取り組みがスタートしました。



03 実際に使ってみました！

今年、庭先集荷を利用したのは、つがる市の木村淳さん。約2畝でスイカを栽培しています。これまでは、朝に収穫したスイカを選果・箱詰めし、トラックに積んでＪＡまで運んでいました。積み込みから運搬まで約1時間かかっていましたが、庭先集荷を利用することで、その時間を別の農作業に充てられるようになりました。



木村さんは今シーズン、7回程度利用！



運搬の時間を別の作業に使えるのが助かる！
午前中に集荷してもらえば、さらにありがたい！！

02 庭先集荷って、どうやるの？

選果・箱詰めしたスイカを階級ごとに専用ボックスへ。ヤマト運輸が作業場まで集荷し、専用ボックスごとトラックへ積み込みます。

生産者はスイカをＪＡまで運ぶ必要がなく、これまで運搬にかかっていた時間を別の農作業に使うことができます。

STEP 1 収穫・選果・箱詰め

収穫したスイカを選果し、箱詰めします。



STEP 2 専用ボックスへ

箱詰めしたスイカを階級ごとに専用ボックスへ積み込みます。



STEP 3 ヤマト運輸が集荷

ヤマト運輸が作業場まで集荷。専用ボックスごとトラックに積み込みます。



STEP 4 ＪＡへ

生産者に代わって、ＪＡまで運びます。

04 これから、もっと便利に

今回の取り組みを通して、集荷時間や方法など、今後に向けた課題も見えてきました。ＪＡ担当者は「実際に利用してみて分かったことや、生産者の声を大切にしながら、より便利な集荷方法を考えていきたいです。他の品目についても、農家の負担軽減につながる方法を検討していきます」と話します。

農家の「運ぶ」を少しでもラクに。
これからも、生産者の声をもとに新しい農家支援のカタチを考えていきます！



7
22

岩木請負剪定隊夏季研修開催



りんご産業を守るため、岩木地区で剪定を請負う岩木請負剪定隊は、目屋支店管内にある米沢久隆さんのりんご園地で夏季研修を開催し、隊員13人が参加しました。

米沢さんより、花芽を付けるための枝を更新するタイミングや骨格の作り方などの説明を受けながら意見交換し、剪定技術の向上に励みました。

参加した隊員の一人は「りんご樹の剪定は常に学習が必要。夏場の研修で学んだことを冬の剪定に活かしたい」と話しました。

同剪定隊は昨年、岩木地区のりんご出荷者園地約16haを請負剪定しました。



JTH型わい化栽培

普通わい性台木を使用し、樹形は、主幹（中心の太い幹）を低く抑えて2本の主枝を通路側に大きく広げる開心形で仕立てます。樹全体が開帳するように芯を剪定し、主枝には角度の狭い同年枝を利用することで雪害の影響も受けにくくなります。

植栽間隔は5m×3mを基本とし、品種「ふじ」では10年を目途に間伐して5m×6mにする2倍密植スタイルです。詳しくは、各地区営農係にお問い合わせください。

りんごの生理生態を基にした栽培方法を学習しながら、りんご産業の維持発展に取り組む北地区りんご栽培勉強会は、指導係の神係長の園地で夏季研修会を開き、会員10人が参加しました。

当JJAが推奨するJTH（JJAつがる弘前）型わい化栽培を自園地で実践する神係長が講師を務め、同栽培における品種ごとのメリットや剪定における注意点などを説明しました。参加者は園地を見学しながら、今後の剪定の見立てなど意見交換し、同栽培について学びました。参加した会員の一人は「JTH型栽培を実演している園地で研修することで、今後の剪定をイメージすることができて良い研修だった」と話しました。

7
27北地区りんご栽培勉強会
夏季研修開催7
31早生種りんご
熟度調査

指導部と各地区営農係は、りんごの収穫適期を見極めるため、熟度調査を実施しています。7月後半からサンつがる、きおうなどの早生種の調査を数回実施し、調査結果を基に、役員や生産者で構成するりんご振興協議会でそれぞれの品種の入庫日を確定しています。

各地区営農係の職員は、山手、高地、里、中間地帯を含めた管内13カ所の園地からサンプルを採取し、硬度や酸度、ヨードなど9項目を調査しました。調査結果から、令和8年産早生種りんごは、平年よりも肥大良好で、酸度とヨードは低いことがわかりました。

指導係の神係長は「鮮度の良いJJAつがる弘前りんごを消費者に届けるため、調査結果と今後の気象を踏まえて、すぐりもぎによる適期収穫を呼びかけていく」と話しました。



笑顔広がる
仲間づくり講習会



7月27日、農協会館にて青森県女性組織協議会主催の「スイーツなバスボムづくり講習会」に参加しました。この講習会は、地域の女性やご家族など、どなたでも参加できる仲間づくりを目標に開催されています。重曹など身近な材料で簡単に作れることもあり、「若い部員の確保につながるヒントが得られるのでは?」と思い参加しました。当女性部からは部員がお孫さんと一緒に参加してくれたほか、「面白そうだな」と興味を持ってくださった地域の方も参加してくださいました。今回の体験を、子どもたちも一緒に参加できるような楽しい講習会の企画に役立てていきたいと思っています。



お孫さんと
楽しく作業しました



青申会
夏期税務研修会



7月31日、本所大会議室にて青申会の夏期税務研修会を開催しました。葉師山正人税理士による「消費税変更に伴う確定申告の変更点」についての講演が行われました。消費税率が変動した場合、「売上（入る税金）は1%なのに経費（出る税金）は10%という逆ザヤ（ミスマッチ）が発生する」と解説しました。講師からは、今後の対策として以下のアドバイスをされました。①領収書・請求書を必ず保管し、インボイス番号の有無を確認する。②売上規模の変化を把握し、簡易課税と本則課税のどちらが得か検討する。③災害発生時は、ニュースや国会動向を注視し、特例や適用期間を確認する。こうしたアドバイスを逃さないように参加者は熱心に耳を傾けていました。



これからの申告について
説明をする講師

第2回農業用使用済
プラスチック回収



8月5・6日の2日間、農業用使用済みプラスチックの回収が湯口・相馬支所2ヶ所で行われました。農業用使用済プラスチックは「廃棄物の処理及び清掃に関する法律」により、農業者自らによる適正処理が義務付けられています。前回の回収では、雪で折れたり曲がった枝受支柱などの廃棄が多く見られましたが、今回は薬剤散布に伴う農薬の空容器が多く見受けられました。生産者からは「空容器や袋が溜まっていたのでとても助かる」と喜びの声が聞かれました。



2日間で790k
集まりました

J Aヘルスアップ講座



8月19日、女性部やエルダーミセス会員等で「JA共済ヘルスアップ講座」に参加しました。8回目を迎えた今回は、健康づくりから落語まで盛りだくさんの内容となりました。講演では、弘前大学名誉教授・中路重之氏より生活習慣病予防と「定期検診・血糖管理・生活習慣の改善」の重要性を学びました。作業療法士・那須識徳氏からは、関節痛を防ぐための1日30分の筋力トレーニングの大切さを教わり、参加者全員で椅子を使ったストレッチも体験しました。後半には『笑点』でおなじみの桂宮治さんによる笑点での裏話や創作落語が披露され、会場は終始笑いに包まれました。健康について学び、体を動かし、大いに笑って心身ともにリフレッシュできる充実した一日となりました。



その場ですぐ出来るストレッチを学ぶ



JA共済ヘルスアップ講座

8月19日、アートホテル弘前シティで「JA共済ヘルスアップ講座」が行われ、組合員が健康づくりについて学びました。

講座では、弘前大学名誉教授の中路重之先生が医学の視点に基づいた健康に関する講演を行い、社会福祉法人農協共済中伊豆リハビリテーションセンター福祉部作業療法士の那須さんからはフレイル・関節痛の基礎知識と予防に関する講演が行われました。

他にもJA共済オリジナルの「レインボー体操」の実演、落語家の桂宮治さんによるお笑いイベントが行われました。講座を通じて参加者は健康について理解を深めるとともに、笑顔あふれるひと時を過ごしました。



ヘルスアップ講座を受講する参加者



水稲採種圃場検査

8月20日、水稲採種圃場生産者を対象に農業普及振興室職員による圃場検査が行われました。この検査は、令和9年度に使用される水稲種子の採種圃場の生育状況を確認し、優良な種子を確保することを目的に年2回実施されています。

検査では、圃場内の稲の生育状況をはじめ、異品種・変種が混入していないか、病害虫が発生していないかなどを確認しました。



検査を受ける生産者



よりよい営農活動講習会

津軽みらい農協青年部は9月1日、黒石地区部員の村岡嘉樹さんのりんご園地と黒石支店会議室で「よりよい営農活動講習会」を開催し、15人が参加しました。講習会では、GH農場評価規程チェックシートを使って農場評価を実施。青年部員を代表して村岡さんが評価を受け、検査員が約38項目を確認しました。「作業員が休暇を取りやすい環境をつくっているか」など農場で働く環境や営農活動の取り組み状況を1項目ずつ点数化されました。

今回の活動を通じて、青年部員は自身の農場環境を見つめ直し、経営改善に繋がっていきます。



農場評価で検査員から質問を受ける村岡さん



青天の霹靂 適期刈取講習会

9月3日、平川市蒲田と藤崎町水木の2地点で「青天の霹靂適期刈取講習会」が行われました。

講習会では、青森県中南農林水産事務所農業普及振興室の職員が講師を務め、青天の霹靂の生育状況や適期刈取のポイントをはじめ、胴割米の発生要因や乾燥時のポイント、農作業事故防止について説明しました。また青天の霹靂の生産を支援するシステム「青天ナビ」も積極的に利用するよう生産者に呼びかけました。



講師から説明を受ける生産者

8/4 ドキドキはじめてのおつかい ～夏休み特別企画

「かだあ〜れでおつかい」～

ファーマーズマーケット「かだあ〜れ」で、夏休み特別企画「かだあ〜れでおつかい」を開きました。小学1～4年生の11人が参加、女性部員やJA職員にサポートしてもらいながら、おつかいに挑戦しました。

保護者が、購入金額1,000円以内でまとめた買い物リストを子どもたちに手渡してスタート。買い物を終えて会計をすませると、笑顔で保護者の元に駆け戻りました。

パンとジュースを買った竹下侑利(たけしたゆうり)君(6)は「食べ物がたくさんあって楽しかった」と笑顔で話していました。

参加した保護者は「子どもに初めて1人で買い物をさせた。お金の使い方を学ぶ良い経験ができた」と成長を喜んでいました。



▲参加した子どもたちと女性部・JA職員ら

8/14 ホクホクのジャガイモを 召し上げれ

～ふるさとのまつり芋煮会～

当JA横浜町支店と野菜振興会横浜町支部は、地域の皆さんとの交流を深めるため横浜町三保野公園で行われた夏の恒例行事「ふるさとまつり」に参加し、芋煮800食を無料で振る舞いました。

同町は県内最大クラスのジャガイモ産地。来場者に地元の農産物の美味しさを味わってもらおうと、収穫したばかりの「メークイン」をはじめ、ネギやニンジン、豚肉などの具材をたっぷり使用し、大鍋二つ分を用意しました。1時間ほどでなくなる人気ぶり。「毎年楽しみにしている」「ホクホクして美味しい」と地元の味を楽しむ笑顔が会場いっぱいに広がりました。

9 省力化で健やかな 稲づくりをサポート

～ドローンを活用した水稲防除～

藤坂支店管内の十和田アグリ(株)は、水稲「まっしぐら」の圃場(ほじょう)に殺菌剤と殺虫剤を農業用ドローンで散布を行いました。水稲の病気「いもち病」と害虫「カメムシ類」を効率的に防除します。

近年高齢化が進む農家にとって、夏の栽培管理は身体的負担が大きな課題となっています。こうした状況の中、スマート農業技術を活用し、省力化を進め、持続可能な農業を目指しています。散布オペレーターの戸沢尚仁さんは「適期に効率よく散布が可能のため、病害虫の被害軽減にもつながる」と話していました。

JA管内全域のラジヘリやドローンでの防除は、約3,370ヘクタールで現在、盛んに行われています。



▲ドローンでの水稲圃場を防除する



▲ホクホクの芋煮を求めて長蛇の列

8/21 伝える力を磨く 若手職員コミュニケーション研修



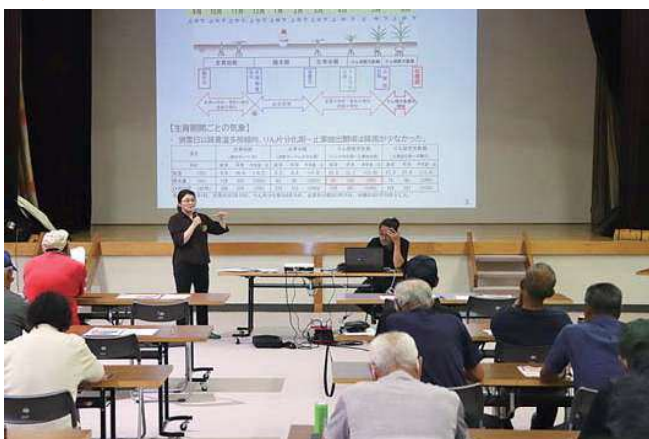
協力してフラフープを持ち上げる職員

J Aゆうき青森は、若手職員を対象にコミュニケーション研修を行った。新採用職員から採用5年目までの8人が参加。「話す・伝える」をテーマに、講義だけでなく、実際に体を動かしながらコミュニケーションの大切さを学んだ。

研修では、参加者全員が人差し指でフラフープを支え、落とさないように声を掛け合いながら移動するプログラムにも挑戦。互いの動きを確認し、どうすればうまく進められるか声を掛け合う中で、相手に分かりやすく伝えることや、周囲の状況を見ながら協力することの大切さを体感した。

参加者からは、「ゲーム感覚で取り組みながら、普段の説明やコミュニケーションで自分に足りていない部分に気付くことができた」などの感想が聞かれた。

8/24 ニンニク植付前講習会



植付前の注意点について説明する講師

J Aゆうき青森野菜振興会にんにく部会は、ニンニクの植付前講習会を開催した。生産者は22人参加し、早ければ9月下旬に始まる秋植えに向け、種子や圃場準備の注意点などを確認した。

講師は、上北地域県民局農業普及振興室の職員が務めた。種子は、Lサイズの玉から形状が良く、腐敗のないものを選ぶよう説明。土づくりについては、「堆肥を使用する場合は、植え付け1ヶ月前に堆肥を入れて土に慣らしてから土壌診断を。過剰施肥にならないよう注意して」と呼び掛けた。

8/25 アロマワックスバーづくり 女性部天間林支部



思い思いの作品を作る部員ら

女性部天間林支部は、八戸市で手芸講習会を開き、部員26人が参加した。フラワーコーディネーターの大澤幸子さんの指導で、火を使わないキャンドル「アロマワックスバー」作りに挑戦した。

参加者は、溶かしたワックスを型に流し、表面が固まり始めるタイミングに合わせて花などを飾り付けた。ワックスが固まった後、型から外してフレグランスオイルを数滴たらし、それぞれ個性豊かな作品を完成させた。

アロマワックスバーは、玄関やクローゼット、トイレなどに飾って香りを楽しむことができる。参加した部員は「いい香りと素敵な花に癒やされる。きれいにできてよかった」と笑顔で話した。

人参ハーベスタ入魂式

にんじんの収穫作業を請け負う人参オペレーター協議会は6月18日に、七百低温倉庫前にて人参ハーベスタ入魂式を行いました。収穫は6月23日から六戸地区で始まりました。夏ににんじんの作付面積は三沢地区96ha、六戸地区60haの計156haで、収穫機計15台で作付面積の約9割を収穫します。にんにくの収穫や他品目の管理作業と重なる時期に、同協議会が収穫を請け負うことで農家の作業省力化につながっています。

中屋敷一夫組合長は「主力品目の一つであるにんじんの販売は野菜販売金額の目標達成のカギとなる。収穫の作業では安全に配慮して事故等のないよう取り組んでほしい」と話しました。



にんにく出荷目揃い会

やさい推進委員会にんにく部会は、7月17日に三沢、六戸地区でにんにく出荷目揃い会を開催しました。全農あおもりの担当者と指導課から、にんにくの出荷規格と出荷時の注意点について説明し、「今回の目揃い会で確認した選別基準を守って出荷してもらいたい。」と呼びかけました。

出荷規格に関して実物を参考にしながら生産者の理解を深めました。指導担当者は、「青森県は、にんにくの一大産地なので、良いにんにくを全国の消費者にお届けしたい。」と意気込みを話しました。



馬鈴薯目揃い会

やさい推進委員会馬鈴薯部会は、7月15日に三沢地区で馬鈴薯目揃い会を開催しました。

全農あおもりの担当者と指導課から、馬鈴薯の出荷規格と出荷時の注意点について説明がありました。出荷規格に関しては実物を参考にしながら生産者の理解を深めました。

部会は今年度666トン(前年比122%)の出荷を計画しています。



乙女座
8/23～9/22

【全体運】運勢は大きく活性化。思案中のことにも方向性を見い出せて新たな一歩を踏み出せます。外出先で良い話を聞けそう。
【健康運】機能性インナーを上手に使って快適さをアップ。
【幸運の食べ物】シメジ

獅子座
7/23～8/22

【全体運】あなたのところにいろいろなことが集中します。丸投げの案件はお断りを。協力し合ってできることを優先して。
【健康運】サプリに頼り過ぎないで。日々の食事を大切に。
【幸運の食べ物】ナス

第1回農政対策委員会開催



▲ あいさつをする木村委員長

農政対策委員会は7月23日、豊崎会議室で第1回農政対策委員会を開催し、委員11人が参加しました。基調講演では、非常勤理事も参加し、東北農政局青森県拠点地方参事官室の水田陽一氏が「先般の米の価格高騰の要因や対応の検証」と題し説明しました。

委員会では、木村照男委員長が「農協として、今後農業が生きていくためには、米や農産物の価格を念頭に置いて政策を進めていかなければならないと思います。この農政対策委員会は貴重な場だと考えます。新たな活動として農政や国、県の啓発活動等も考えながら、皆で取り組んでいきたいと思います」とあいさつ。令和7年度活動報告や令和8年度活動計画について協議し、全ての案件が満場一致で承認されました。



▲ 基調講演の様子

プラム晩成種目揃会開催



▲ 選果基準を説明する小野販売担当

プラム・ブルー専門部まべち支部は8月10日、プラム晩成種の目揃会を三戸営農センターで開き、品質統一に向け、選果基準や出荷規格などを確認しました。

目揃会では、本澤博路支部長が「中生種については天候の影響から、思うような出荷ができなかったと思いますが、晩成種の「太陽」や「秋姫」などについても引き続きの出荷をお願いします」とあいさつしました。全農あおもりりんご課の竹村歩己担当より販売状況が報告されたほか、小野宏典販売担当より選果基準について説明がありました。

小野販売担当は「長雨の影響から軟化が進んでいるものもあります。収穫適期指標をもとに、収穫遅れを防ぎ、適期の収穫をお願いします」と呼びかけました。

ながいも 病害虫防除の徹底を

ながいも専門部は8月4日から6日、12日と管内4ヵ所で栽培講習会を行いました。このうち、12日に五戸営農経済センター（東部）で行った講習会では10人が参加しました。

講師は農業普及振興室の木下貴之主幹が務め、生育状況、風水害対策や病害虫防除などについて説明しました。生育観測ほでは、7月中旬の日照不足の影響から、つるのネット頂到達は平年より7日遅れとなったことを報告しました。また、台風などの強風、大雨に備え、支柱の補強や明渠の設置など事前対策を徹底するよう呼びかけました。

さらに、最終追肥は8月20日までに終わるよう話しました。現在、葉渋病やナガイモコガの発生が見られることや、8月後半から9月にかけて、炭疽病も発生しやすいため、病害虫防除を徹底するように促しました。



▲ 注意点を説明する講師

JA自己改革のシンカ

農業編

No.11
2026.7.31

神奈川県 JA横浜

地域の活性化

女性農業者講座で 約300人の女性担い手を育成

※シンカは、以下の3つの意味を含めた言葉。

自己改革の進化から深化へ、真価を発揮する
3つの「シンカ」



女性農業者を担い手に 基礎から技術・経営を学ぶ場を提供

神奈川県のJA横浜は、地域農業の持続的な発展に向け、女性を地域農業の担い手として位置づけた人材育成講座「女性農業者講座」を2006年から実施しています。農業人口が減り続ける中、20年間で約300人が講座を受講し多くの修了生が実際に就農するなど、地域農業を支える重要な担い手として活躍しています。

「女性農業者講座」では、座学と圃場（ほじょう）実習の独自のカリキュラムを展開しています。現在は、Uターン新規就農者と合同で運営されており、今年度は約20人が受講しています。

JA横浜の「女性農業者講座」の概要

設立	2006年度
受講人数	約300人
内容	講義と野菜を中心とした圃場実習
開催頻度	毎月1～2回。年間計15回程度

座学と実習の連動が強み 専門家による伴走支援

同講座の最大の特徴は、座学と実践的な実習を組み合わせた内容の濃いカリキュラムです。受講生は午前中から夕方まで、ほぼ丸1日をかけて栽培管理や出荷調整、肥料や農薬の使い方、農業経営の基礎などを学びます。講座は毎月1～2回、

年間のカリキュラム例

4～8月	夏野菜の定植、管理、収穫や 土壌分析結果の見方、農薬の 使い方
9～12月	秋冬野菜の定植、管理、収穫や 果樹の栽培管理、収穫
1～3月	土づくり、農業経営の基礎



畑で熱心に定植作業の手順を学ぶ受講生たちの様子

年間15回程度開かれます。2026年は、特に加工品に関する講義を充実させています。

実習の場は、JA横浜の「きた総合センター」（横浜市都筑区）に隣接する専用の圃場です。ナスやトマト、キュウリ、キャベツといった地域で親しまれる主要な野菜を中心に栽培を実践します。また、地元の果樹農家で現地実習も行います。

指導に当たるのは、県の農業技術センターなどで技術の研究に携わってきた経験豊富な営農技術顧問です。専門知識に基づいた丁寧な指導に加え、同じ立場の受講生同士が気兼ねなく質問や相談ができる環境が整っており、「参加しやすい」と高い評価につながっています。

2026年は「国際女性農業従事者年」 女性がけん引する主体へ

JA横浜は、地域農業における女性の役割や存在感を、これまで以上に高めていきたいと考えています。女性農業者は地域において、生産、出荷調整、直売、加工、地域とのつながりづくりなど、さまざまな場面で役割を担っています。今後は「支える存在」にとどまらず、農業経営や地域農業をけん引する主体として活躍できる環境づくりを進めていくことが重要だと考え、後押ししていく方針です。また、先輩女性農業者の活躍を積極的に発信し、ロールモデルを示すことで、女性の視点や感性を地域農業の新たな価値創出へとつなげ、より女性が活躍する地域農業の実現を目指しています。



地域農業の担い手として期待される受講生たち

問い合わせ JA全中 JA組織・経営対策部 JA改革支援課 ☎03-6665-6040 ✉jakaikaku.s@zenchu-ja.or.jp

JAグループのホームページから、自己改革の成果をまとめた動画や全国のJAの取り組みがご覧になれます。

<https://org.ja-group.jp/challenge/>

発行／JA全中（一般社団法人 全国農業協同組合中央会）



JAグループ

耕そう、大地と地域の未来。

JA自己改革のシンカ

くらし・
地域編

No.12
2026.9.30

兵庫県 JAたじま

JAの食農教育等応援事業

小学校への独自支援

食農教育や環境保全教育で地域活性化へ

※シンカは、以下の3つの意味を含めた言葉。

自己改革の進化から深化へ、真価を発揮する
3つの「シンカ」



小学校の切実な声からスタート、管内全20校へ広がる支援の輪

兵庫県のJAたじまは、教育の一環で野菜の栽培などに取り組む小学校に対し、苗や肥料といった資材の費用を最大5万円助成する「食農教育等応援事業」を独自に取り組んでいます。2022年度に事業が開始され、26年度には管内の全20校が活用しています。

事業を活用する小学校では、春から秋にかけてトマトやピーマン、ナスといった夏野菜や、バケツ稲を学校で栽培。JAの環境保全型栽培稲作「コウノトリ育む農法」について、JA職員が説明し、田んぼの生き物調査をする場合もあります。児童が栽培に関わることで、学校関係者からは「地域に見守られ体験学習ができる機会が貴重」などの声が上がっています。



田んぼの生き物を調査し(左)、捕まえた生き物を観察する様子(右)

地域と学校が一体となった食農体験と、広がっていく参加者の笑顔

JAは以前から、JA兵庫信連による環境保全教育助成事業を活用して食育活動をしていましたが、コロナ禍の20年度に中止しました。その後、管内の小学校からは「同じような助成事業をJA独自でできないか」という要望が多数寄せられました。これを受け、JAは学校単位で行う食農教育や環境保全教育に関する活動費用を助成する事業を独自にスタート。当初は最大3万円の助成を実施し、現場のニーズを捉えた取り組みは大きな反響を呼びました。

事業の特徴は「壁新聞」の作成です。児童は、栽培の記録や感想を模造紙にまとめ、JAに提出します。「壁新聞」を最寄りのJA支店に展示することで、来店した児童の祖父母から「孫の姿を見に来た」と喜ばれ、支店が世代間交流の拠点となっています。



児童が作成した「壁新聞」

「食と農の大切さ」を次世代につなげる

JAは小学校への支援だけにとどまらず、小学生を対象にした「あぐりキッズスクール」も開催しています。

4～11月にかけて月に1度、果樹農家の圃場（ほじょう）で果物の管理作業を体験したり、稲作農家で田植えから収穫まで体験したりします。こうした教育活動を通じて、若い世代や地域住民に地産地消の重要性や農業の多面的機能を伝えるとともに、JAが地域社会に不可欠な存在であることを強くアピールしています。JA担当者は「農業地帯にありながら、自宅では農業体験をする機会が減っています。食と農の大切さを理解してもらい次世代につなげていきたい」と話します。

今後も持続可能な地域社会づくりを目指し、食と農を通じた地域とのつながりを深めていく考えです。



(上) 真剣な表情でナシの受粉作業に挑戦
(下) 収穫したばかりの新鮮野菜でカレー作り

問い合わせ JA全中 JA組織・経営対策部 JA改革支援課 ☎03-6665-6040 ✉jakaikaku.s@zenchu-ja.or.jp

JAグループのホームページから、自己改革の成果をまとめた動画や全国のJAの取り組みがご覧になれます。

<https://org.ja-group.jp/challenge/>

発行／JA全中（一般社団法人 全国農業協同組合中央会）



JAグループ

耕そう、大地と地域の未来。



©みんなのよい食プロジェクト